

平成 29 年 5 月 3 日

## 平成 28 年度総合文化研究所研究助成報告書

研究の種類	・海外共同 ( ) ・共同研究 ( ) ・個人研究 (○)	
研究代表者 (所属・職・氏名)	文芸学部 教授 村井 華代	
研究課題名	現代イスラエル演劇の諸問題	
研究分担者氏名	所属・職	役割分担
研究期間	平成 28 年 4 月 1 日 ~ 平成 29 年 3 月 31 日	

## 研究実績の概要（1）

全く不案内なところから独学でイスラエルの現代演劇、並びにヘブライ語演劇発祥についての研究を開始し、観劇と理論研究の両輪で進めて5年目を終えた。総合文化研究所から2012 - 13年度、2015 - 16年度に頂いたユダヤ・イスラエル関係の演劇についての助成の賜物であり、心より感謝したい。

2016年2月には、東京大学でおこなわれたシンポジウム「越境するユダヤ演劇」でのパネリストとして、ヘブライ語・イスラエル演劇についての小講演をおこない、同時にそこで上映されたテルアビブ大学芸術学部演劇学科教授ツヴィカ・セルペル博士演出による舞台映像『ディブブック』の字幕協力をした。これは総合文化研究所紀要20号（2014）に掲載された拙論『S.アンスキ『ディブブック』とユダヤ演劇の近代』における実績に直接に基づいた活動であった。

また、総合文化研究所紀要21号（2015）の『イスラエル/パレスチナ対立への演劇的アプローチ：『シルワンの孔雀』（2012）を中心に』は、2017年4月現在、依然としてイスラエルの同時代演劇を詳細に取り上げた国内唯一の報告である。2012年初演時に観劇した作品『シルワンの孔雀』の演出家ヘン・アロンの組織する平和運動団体Combatants for Peaceは、2017年ノーベル平和賞候補にノミネートされている。現在のところ日本語でしか発表していない論文だが、こうした日本では余り知られない現代イスラエル社会の動きを理解する一助となることを願っている。

2015-16年度も、現代イスラエルの演劇の総体への知見を深めつつ、具体的な作品についての紹介を進め、2016年1月には西洋比較演劇研究会にて口頭発表「ドラマ国家の未完のドラマ —— イェホシュア・ソボル『シューティング・マグダ（パレスチナの女）』とイスラエル」をおこなった。この発表の主旨は、劇作家ソボルが、イスラエルという「ドラマ化」の国家的イデオロギーをメタシアトリカルな方法によっていかに批判的に解体しているかということだった。この検証を通じ、ソボル氏から代表作『エルサレム・シンドローム』（1987）の未刊行の英訳版の提供を受けた。ユダヤ人の故国喪失を決定づけた、紀元70年のローマによるエルサレム包囲と神殿破壊の悲劇を、とある大学教授が演出するというこの戯曲は、初演当時、右派から過激な妨害を受けた問題作である。民族の英雄譚を狂気のレビューショーに書き換えたこの戯曲についての記述は困難を極めるが、慎重に進めている。

同時に、ソボル作品への注目は、個々の劇作家についての議論ではなく、メタシアターと国家イスラエルについて記述するための過程でもあった。2016年度は、イスラエル演劇の絶頂期であった1980年代を支えた幾人かの劇作家の作品の検証を続け、特にイツハク・ラビン首相の暗殺劇が精神病院の患者によって演じられるというモチィ・レルネルの『イサク殺し』（1997）に関心をもって研究を進めていた。2016年10月のアッコーフリンジ演劇フェスティバルでの観劇や、上記ツヴィカ・セルペル教授の仲介を経ての2017年2月にテルアビブ大学図書館と演劇アーカイブへの訪問を通じて、一連の課題への取り組みは一層深化している。

結局、時間の制約のため、総合文化研究所紀要への年度内への寄稿は見送らざるを得なかった。が、戯曲の翻訳の発表も含め、非常なアクチュアル性を持つ現代ヘブライ語演劇の紹介は周辺からの期待も大きい。研究論文の発表のみならず、劇場など、多様な方面での発表を早急に実現したい。